平成2６年度第１回大阪府市文化振興会議　議事要旨

１　日　時　　平成26年５月１９日（月）午後１時30分～３時

２　場　所　　大阪市役所　屋上（P1）階 会議室

３　出席委員　橋爪会長、中川副会長、池末委員、井上委員、太下委員、佐藤委員（ＡＣ部会長）、松尾委員、山川委員、山口委員、山下委員

４　議　題

（１）アーツカウンシル部会の取組みについて

（２）その他

５　議事概要

（１）アーツカウンシル部会の取組みについて

　○佐藤部会長から、まず、大阪アーツカウンシルのホームページ開設と大阪府立江之子島文化芸術創造センター（enoco）ライブラリーでの活動開始を報告。

次に資料１をもとに、アーツカウンシルの取組みついて大阪府市文化振興会議に報告。主な内容は次のとおり。

・前回会議での議論を踏まえ、大阪府市文化課４４事業について、文化振興計画の3つ方向性であるＡ「文化創造の基盤づくり」、Ｂ「都市魅力の向上」、Ｃ「人と地域のエンパワーメント」に沿って、アーツカウンシル部会で改めて整理。その結果、Ａ領域に事業が集中しており、B領域、C領域は弱いことが分かった。

・Aの領域は文化を作るためのファンダメンタルとしてとても大事だが、BやCの領域を伸ばして行くことが、今日の社会の要請。

・Bの領域を伸ばすためには、どういった事業かということを見せる発信力と事業のコンテンツが府民のニーズに沿っているかを考える必要がある。

・また、エンターテイメント産業といったDの領域や、ダンス、メディアアートといった新たな分野であるEの領域は都市魅力向上に非常に貢献している。行政として、サポートする可能性も検討すべき。

・以上の分析を踏まえると、現状として、例えば次のような改革案が考えられる。

プロデューサー、ディレクターを育てる連続講座

社会のための芸術を実現するためのパイロット事業

大阪市助成金の特別枠などを活用した中之島エリアでのフェスティバル事業

発信力を高めるための民間ポータルサイト等との連携

メディアアートといった、新たな分野の調査・研究

○委員から次のようなコメントがあった。（→は佐藤部会長）

・まず、事業分類については、文振計画よりもアーツカウンシルが設定した「文化をつくる・都市をつくる・未来をつくる」の軸のほうが整理しやすいのでは。フェスティバル方式は、府市事業のプロモーションを効率的に行い、プロデューサー育成にも繋がるので、是非実行して欲しい取組み。新分野については、国でも取組みが始まっているが、扱いがとても困難な印象。官が関わるとすれば、そのジャンルの人達が思いっ切り仕事が出来るよう、規制を取り除くといったやり方がいいのでは。

・佐藤部会長から報告があった連続レクチャーについては、既に現場を持っている人を想定。現場で孤独に悩んでいる人への勇気づけと、異なるジャンルが交流できる場の提供。それぞれのネットワークが繋がることによって、次のアクションが生まれるのではと考えている。

・池末委員が仰るように、新分野は難しいと感じている。しかし、ストリートダンスのパフォーマーと東京大学の大学院で映像を研究している人達がくっついて、新しいものが生まれたといった現場に最近関わった。海外のフェスティバルでも、パフォーミングアーツとデジタルが組み合わされた作品が出始めてきている。そういった新分野にも、フェスティバル形式で参加を募ることが出来るのでは。

・４点ほど。まず事業の整理については池末委員と同意見で、アーツから出された３つの基準がしっくりくる。次に、民間と連携した情報発信については、チケット販売と組み合わせた形のシステムを作り、行政として期間を定めて助成するのはどうか。３つ目は、社会のための芸術を実現させるためのパイロット事業について。素晴らしい提案だと思うが、これについては、現行の補助金事業から資金を捻出するのはいかがか。府市の文化予算も厳しいので、職員が、アートを活用した社会課題の解決を庁内で呼び掛け、別の施策分野から資金を獲得すべき。最後は、大阪らしい文化について。今、エイブルアートが東京で盛んだが、大阪のほうが歴史がある。ロンドンオリンピックでもエイブルアートが支援されていたので、東京オリンピックを見据えて大阪でも力を入れるべき分野では。映画でも、日本のような誤解されているものではない、アメリカ流のフィルムコミッションを大阪でスタートしてはどうか。

・太下委員の、他分野からの資金獲得のアイデアに大賛成。福祉や教育等といった社会課題を解決させるため、芸術を他部局へ展開させる必要性を私も感じる。Cの領域が少し分かりにくい。例えばCの領域は、文振計画では「人と地域のエンパワーメント」なので、「子どもパフォーマー事業」は次世代育成の観点からではAではなくCの領域なのでは。

　→「子どもパフォーマー事業」も最初はCの領域に分類していたが、鑑賞系の事業については、文化の枠組みの基盤づくりという要素が強いので、Aの領域とした。鑑賞事業は、今後Aの領域に留まらず、Cの領域に伸びて欲しいと考えている。

・鑑賞教室は未来の芸術家を育てるといった事業目的があったかと思うが、それだけではなく、文化がなければ都市が崩壊する、教育の分野には文化芸術が必ず導入されるべきといったことになれば、他部局との連携の可能性がもっと出てくるのでは。

・文振計画で決めたことばかりに引きずられると、分かりにくくなる。アーツの「文化をつくる・都市をつくる・未来をつくる」に基づいて事業を考える方が実践的では。また、文化予算が今後も減るという考え方もあるが、私は違うと思う。アーツカウンシルで適正な仕組みが出来れば、文化芸術予算を増やすとの発言もある。府民や議会に説明出来るような具体的な提案がアーツカウンシルからあれば、それを実現させるために文振会議も動く必要がある。

・元々芸術に興味があったり関与したりしている人々だけではなく、そういったものに関心がなかった層に参加してもらえる下地をいかにして作るか。それが「人と地域のエンパワーメント」。行政はこれが非常に苦手。どこまでコントロールをしないか、また規制を緩和できるかといったことが重要。

・「人と地域のエンパワーメント」でアウトプットされるものは、芸術の鑑賞といったものではなく、例えば、プラットフォーム形成事業での住民参加の場づくりといった、どちらかと言うと分かりにくいもの。分かりやすくなるよう、イメージ作りなどに挑戦したい。

・先日あるコンサートに参加した時に、あるアーティストがラバーダックにインスパイアされて、将来的にはこういう事業を手掛けてみたいと話され会場が沸いていた。このようにこれがまた違う人にどんどん伝わっていき、いつしか文化として定着し、広まっていくのかなと感じた。また他の地域のアーティストが、大阪に来るのは怖いと発言されていた。お客さんが厳しく、大阪以外で受けるものも受けなかったりというのがその理由。そういった要求の厳しさも、また大阪の特徴なのかなとも感じている。

・文振計画については、そんなに難しく考える必要はないと思う。A「文化創造の基盤づくり」はシンプルに例えるなら爆弾作り。人材やノウハウといった人的ネットワークが起爆剤となる。そういう意味で、織田作之助賞や子どもパフォーマーが本当に起爆剤として足りていたのか、反省や検証が必要かもしれない。

・その起爆力に基づいて都市の魅力が爆発する。垂直的な発信力となるB「都市魅力の向上」。これはすごいエネルギーがいるし、挑戦的である必要がある。キーワードは垂直・反発・柔らかさ・弾力性。

・これに対して水平的に伝わり、広がっていくのが「人と地域のエンパワーメント」。ブレーカープロジェクトなどの実績を他市にも展開して欲しい。また、アートが医療とどう提携できるか、専門家である山口委員のアドバイスが欲しい。

・アーツの来年度実施のプロジェクト提案に期待している。その際に、次年度予算で行政に固まって欲しくない。アーツと対話しながら予算を築き上げていくプロセスを確立して欲しい。アーツを作ったから終わりではない。むしろこれから。アーツの提案にはしっかりと予算を投入して欲しい。また、毎週金曜日だけというのではなく、必ず誰かいるような常設事務所をお願いしたい。

○会長が、本日の審議について、次のようにまとめを行った。

・今回の新規提案は、アーツカウンシルを設立したから、このように変わったと打ち出しが出来る初めてのタイミングとなり、きわめて重要。既存事業の再編だけでなく、新規の施策として実現しなければいけない。

・フェスティバル運営枠については、その助成によって自立を手助けし、大阪の名物として世界に発信できるものに支援されるべき。

・中之島では、新美術館や中之島ミュージアムアイランド構想もある。このエリアを触媒とするならば具体的な事業をどのように展開するかを具体に考えていただきたい。また、来年度だけでなく2020年まで考えたときには、太陽の塔のある万博公園エリアなど、府下のいくつかの拠点についても考えていかなければならない。

・民間の事業と、行政がサポートしてアーツカウンシルが関わる事業とが、どう違うのかが少し分かりにくい。また、官民連携のあり方についても、アーツカウンシルから具体的な提案があればお願いしたい。

（２）その他

　特になし。

（閉会）